

日本語系統論の現在：これからどこへ

アレキサンダー・ボビン

ハワイ大学

キーワード：日琉祖語、日本語、アルタイ語族、混合言語、韓国語、満州ツングース語

日本語系統の仮説

日本語の起源については、少なくとも二百五十年程前から、色々な仮説が出されてきた。これまで多くの学者に支持されている日韓同源説も、新井白石という国語学者によって、江戸時代中期に初めて提案された。しかし、十八世紀には比較言語学の方法が存在しなかったため、なかには何の根拠もない夢想的な仮説もあった。現在は比較言語学の方法が確立されてすでに百八十年になるが、今だに十八世紀と同じレベルの仮説が提起され続けているのは信じ難い事実である。本稿では、日本語がSumer語に関係があるとか、どこかの西アフリカの言語に関係があるとかという何の根拠もない理論を考慮に入れるつもりはない。ここで取り上げるのは、少なくとも可能性がある仮説だけである。以下、可能性の低いものから可能性の高いものの順序で詳しく見ていきたいと思う。

タミル語仮説（大野晋）

タミル語仮説は日本の大野晋が発展させてきた（大野 1980、1994ab、2000）。一部のタミル人言語学者に支持されたと同時に、日本とインドのタミルナドゥ州である程度マスコミの人気を得たが、世界中のドラヴィダ諸言語の専門家と日本語の専門家には受け入れられなかった（村山 1982, Zvelebil 1990, Krishnamurti 2001）。特に、国際日本文化研究センターで開かれた『日本語＝タミル語同系説』というシンポジウムでは、大野晋のタミル語仮説は日本の言語学者やインド学者にも強く批判された（長田1996、児玉1996、家本1996、山下1996）。そこで明らかになったのは、大野晋のタミル語仮説には、歴史的、考古学的、文献学的な間違いが多く、その上大野晋が比較言語学の方法を正しく使っていないという事実であった。たとえば、大野（2000：35）は日本語とタミル語の間に次の『対応』を掲げている。

タミル語 c- : 日本語 s-

タミル語 c- : 日本語 ゼロ

タミル語 ゼロ : 日本語 s-

このような分裂した対応が存在しないわけではないが、何の条件も提示されていない場合には、信頼性に欠ける。とにかく、村山、長田、児玉、家本などが出した大野晋のタミル語仮説の批判が完全なので、ここでそれに付け加える必要はないだろう。

オーストロネシア語仮説 (川本、Benedict)

大野晋のタミル語仮説と同じように、資料の扱い方と対応の規則に大きな問題がある。私は以前にも川本とBenedictのオーストロネシア語仮説についての細かい批判論文を出したので (Vovin 1994a, 1994c)、ここでまた自説を繰り返すつもりはない。しかし、大野晋のタミル語仮説と比べて、オーストロネシア語仮説の方がまだ注目すべき点がある。それは、Benedictが提案した語源のうちのいくつかは、オーストロネシア語起源かもしれないということである。とはいえ、その語源の数は非常に少なく、日本語は元来オーストロネシア語の一つだったということの証拠にはならない。

アルタイ・オーストロネシア混合言語仮説 (Polivanov1924、村山1981など、崎山1985など、板橋 (90年代の半ばより))

この混合言語仮説にたてば、アルタイ諸言語の立場からでは説明できない日本語の要素を説明できる可能性がある。しかし、前にも言及したように、オーストロネシア語の要素は日本語には非常に少ないと思う。

もし日本語がアルタイ・オーストロネシア混合言語だとすれば、今までに掲げられたオーストロネシア語起源とみなされる対応語には、比較言語学の見地に立つと、問題点が多い。特に、村山七郎と崎山理の掲げた対応語の中には、正しい対応語が全くないわけではないが、問題点が多い。アルタイ・オーストロネシア混合言語仮説のうち板橋の混合言語説が最も将来性のある仮説だが、まだ疑問点が残っているように思う。

たとえば、板橋 (1998) は上代日本語の人称代名詞の起源について重要な仮説を出した。その仮説によれば、上代日本語 *wa-*「わ」(<日本祖語 **ban*) はアルタイ祖語の**ba/e-n*「われ」にさかのぼるが、一方では、上代日本語 *a-*「あ」はオーストロネシア祖語 **aku*「私 (一人称単数)」にさかのぼる。また板橋が指摘するように、*wa-* > *a-*という軟音化は上代日本語にとって典型的な変化ではない。(wameku > ameku「喚く」はその軟音化のもう一つの例であるかもしれない)。よって、上代日本語 *wa-*「私 (一人称単数)」と上代日本語 *a-*「私 (一人称単数)」は多分別々の語源をもつという板橋の説明は正しいだろう。しかし、別々の語源であるからという理由で上代日本語 *a-*「私 (一人称単数)」とオーストロネシア祖語 **aku*「私 (一人称単数)」を直接につなげられるか、というのは別問題である。私の知る限りでは、どんなオーストロネシア語も、**a-*は第一人称代名詞としては使われていない¹。いつも**aku*またはその省略形**ku*としてしか表れていないので、上代日本語 *a-* とオーストロネシア語 **aku* を対応させるのは難しいように思われる。

1 フィリピンのカガヤヌン語にはa「私」は存在するが、カガヤヌンのaはfocused actorの形式だけで、non-focused actorの形式はkoである。又、カガヤヌン語はマノボ語群のフィリピン語の一つで、このa「私」がフィリピン祖語にはさかのぼらない。最後に、カガヤヌン語について知られている事は実に少なく、特にカガヤヌン語の史的音韻論はまったく不明なので、このa「私」という形式がどういうふうになり立ったか全く分からない。

最近のオーストロネシア諸語との比較を見ると、一番大きな問題はどのオーストロネシア語と比較するかということであろう。まず、オーストロネシア祖語との比較は不可能である。オーストロネシア祖語は少なくとも紀元前6,000年にさかのぼるということだからだ (Blust 2000, 私信)。また、日本語のオーストロネシア系の語源はおそらくオーストロネシア祖語とはほとんど一致しないということだ。たとえば、日本祖語 **ta-Ci* 1.3b L-L「手」はよくオーストロネシア祖語 **tangan*「手」と比較される。しかし、**tangan*はマライ系の言語にしか出てこないのである。オーストロネシア祖語の「手」に相当する単語は間違いなく **lima*で、日本語にはそれに対応する単語はないだろう。

崎山理はアルタイ・オーストロネシア混合言語仮説の支持者の一人として、この問題をはっきり理解しているように思われる。従って崎山はオーストロネシア祖語ではなくマライ・ポリネシア祖語と日本祖語を比較している (崎山 1990、1991、1996、2001)。しかし、この比較にも問題がある。マライ・ポリネシア祖語と日本語の基礎語彙を比較する場合には、可能とみられる対応語は大抵日本祖語では一音節で、マライ・ポリネシア祖語では二音節なのである。とすると、日本祖語とマライ・ポリネシア祖語との間に規則的な対応を成り立たせるためには、日本祖語の中に音節の脱落の証拠となる規則的な変化を見つけなければならない。通常、このような音節の脱落の影響はアクセントに残るはずである。しかし、日本語も日本祖語もピッチ・アクセントなのにもかかわらず、マライ・ポリネシア祖語の二音節語のうち一音節の脱落の日本語におけるアクセントへの影響が見つけられないのである。いいかえれば、マライ・ポリネシア祖語の二音節語と対応すると思われる日本祖語の一音節語には、アクセントに着目すると、規則的な対応がないのである。たとえば、次の二つの例を見ると、このことが明白になるだろう。

崎山理は日本祖語 **ma-Ci* 1.3a L-H「目」とマライ・ポリネシア祖語 **mata*「目」とを比較し、また一方では、日本祖語 **po-Ci* 1.3b L-L「火」とマライ・ポリネシア祖語 **apuy*「火」とも比較している (崎山2001: 471)。日本祖語の $C_1V_1C_2V_2$ の構造における **ta-* < **tangan* のような第二音節が脱落する可能性を否定するわけではないが、後者のマライ・ポリネシアの語源をよく見ると、彼の比較は規則性に欠けているのが分かる。前者の例と違い、ここでは最後の音節ではなく、最初の音節が脱落している。しかし、日本祖語 **ma-Ci* 1.3a L-H「目」、**ta-Ci* 1.3b L-L「手」、**po-Ci* 1.3b L-L「火」は、いずれも同じ低起式のアクセント類に属し、アクセントの立場から見ると、第一音節の脱落、第二音節の脱落が不規則的に起こることは考えられない。日本語のアクセントをみるかぎり、マライ・ポリネシア祖語から日本祖語までにいたる音節脱落を証明するのは不可能であろう。

崎山理は最近、基礎語彙だけではなく、マライ・ポリネシア祖語と日本祖語の文法要素の比較も試みていて (崎山2001: 473-478)。しかし、崎山の比較はだいたい上代日本語の動詞と形容詞の接頭辞と代名詞である。まず、上代日本語の動詞と形容詞の接頭辞を一通り見てみようと思う。崎山は自分自身が比較の対象に使っている上代日本語の動詞と形容詞の大部分の接頭辞の文法的な意味を知らないようである。たとえば、崎山は上代日本語の *ta-* が「偶発性」で、*ka-* が「被災的」で、*sa-* が「類似概念の派生」だと指摘している (崎山2001: 473)。しかし、

この崎山があげている文法的な意味が何に基づくものなのかが全く示されていない。信憑性の高い上代日本語の参考書をみても、その定義と崎山の解釈は一致しないのである。たとえば、「時代別国語大辞典」には次のように定義されている。ta-には「ひろく名詞・副詞・動詞・形容詞に冠して用いられる」として定義がなく（澤潟1967：408）、ka-は「主として形容詞に接してその意味に一種の色調をそえる」（澤潟1967：170）で、sa-が「ほとんど実質的な意味はない」（澤潟1967：317）。岩波「古語辞典」を調べると、ta-が「意味は不明」（大野1990：755）、ka-が「見た目に…のさまが感じ取れるという意を表わす」（大野1990：261）で、sa-は「語義不詳」（大野1990：530）とある。崎山が比較に選んだその他の「上代日本語の接頭辞」は形態論的な分析の間違いだけにはとどまらない。たとえば、使役のpa-は（崎山2001：473）上代日本語には存在しないのである。このような、ある言語には存在していても、ある言語では存在しない接頭辞の文法的な意味の比較は、何も証明することはできない。崎山がこれらの上代日本語の接頭辞の「文法的意味」を、その比較の対象であるマライ・ポリネシア語の接頭辞に対応させるために作り上げたということは明白である。いうまでもなく、そのような方法は比較言語学の方法に反している。崎山は上代日本語の代名詞の分析も試みているが、その分析法も比較言語学の方法に反している。しかし、その批判は長くなるのでここでは省略する。

アルタイ語仮説（Miller、Itabashi（90年代半端まで）、Starostin、Vovin（最近まで））

アルタイ語仮説は、タミル語仮説とオーストロネシア語仮説に比べれば、長所は多いが、短所も少なくはない。

日本語とアルタイ諸言語のあいだの子音とアクセントの対応がだいたい成立するという意見がある（Starostin 1991）。しかし、明らかでない点もまだ多く見られる。特に、語中の子音の対応が十分に調べられていない。いうまでもなく、規則的な音韻対応だけでは言語の同系の証拠にはならない。たとえば、中古中国語と日本語の間には理想的なほど、子音だけでなく母音の規則的な対応も存在する。しかし、中古中国語と日本語は同系の言語ではない。その完璧といえる対応は基礎語彙と基礎文法要素までには及ばず、借用語にとどまるからである。後に詳しく述べるが、アルタイ語族が五つの言語（日本語、韓国語、満・ツングース語、モンゴル語、チュルク語）からなっているというMiller-Starostin説のアルタイ諸言語の間には、その音韻対応を後ろ楯する基礎語彙と特に基礎文法要素が非常に少ないのである。

また、アルタイ語仮説には、他の問題も少なくない。たとえば、母音の対応が明らかではない。今まで掲げられた母音対応は、ほとんどの例において規則的ではなく、例外が非常に多いのである。アルタイ語仮説の積極的な支持者の論証には言語学的、資料の扱い方の間違いなどの重大な欠点がある。そのような間違いの中には信じ難いほど稚拙なものもある。ここでは、スタロスチンのアルタイ語仮説を例にして、そのような間違いの幾つかを詳しく見てみようと思う。

スタロスチンのアルタイ語仮説

1) 資料の取扱いの問題点

兎は卵。

Dolgopolsky (1999 : 84)によると、Starostinがたてたアルタイ祖語に*u「卵」という単語があったという。そして、その再構は日本語に基づくのだというのである。しかし、日本語には*u「卵」などという単語はない。おそらくStarostinは漢字の「卵」と「卵」の区別がつかなかったたのであろう。

人間には目が二つあるから、祖語にも「目」という単語が二つあった。

スタロスチンの日本語再構はよくアルタイ語源に一致するが、日本語のデータを無視している。たとえば、スタロスチンは日本祖語 **māN-i* (1991: 87) と日本祖語 **māiN* 「目」を (1991: 265) 両方再構した。彼の再構は中期韓国語の *nwún* 「目」と一致することになっているが、この再構は日本語のデータに沿うものではない。まず、*-N* は波照間の *miN* 「目」に基づいた再構だが、この *-N* は波照間にしか存在しないため、疑わしい。やはり、この *-N* は二次的なものであると考えられる。波照間の *putugiN* 「仏」などを見れば (Martin 1987 : 74-75)、明白だ。第二に、スタロスチンの日本祖語 **māN-* は波照間の *miN* 「目」と対応していない。波照間の */i/* は琉球祖語の **e* (<日本祖語 **a[C]i*) にさかのぼるが、日本祖語 **a* にはさかのぼることができないからである。

2) 内的再構の問題

スタロスチンは内的再構にもあまり注意していない。たとえば、上代日本語 *isi* 「石」<日本祖語 **(d)isi* 2.2b は上代日本語 *isagwo* 「砂」(中古日本語 *iságó* 3.1) と同じように取り扱っているが (1991 : 267)、これらは語源的に関係はないだろう。まず、*isi* 「石」(高低 2.2b) と *isagwo* 「砂子」(高高高 3.1) は別々のアクセントの型に属している。第二に、上代日本語 *isagwo* 「砂」は三拍語で、合成語である。そして「砂」は **isa-n[o]-kwo* にさかのぼる。(*-n[o]* は属格の助詞で、*kwo* は上代日本語 *kwo* 「子」、「卵」である。最初の要素の *isa-* は上代日本語 *iswó* 2.1 「磯」<日本祖語 **isa-Cu* と語源的な関係があると思われる。*isagwo* HHH (3.1) と *iswo* HH (2.1) は同じ高高のアクセントの型に属するため、上代日本語 *isagwo* 「砂」は <**isa-n[o]-kwo* 「磯の卵」という語源であるとみなすのが妥当である。やはり、「石」とは語源的には何の関係もないだろう。

3) アルタイ説は何よりも重要である。

スタロスチンは最近の論文でアルタイ祖語 **ephe* 「食べ物、パン」という新しい語源を提出している。その語源の基礎はチュルク祖語 **ep-mek* 「パン」、ツングース祖語 **epe-* 「ケーキ」と上代日本語 *opo-mono* 「食べ物」(Starostin 1999 : 148) とされている。しかし、上代日本語の *opo-mono* はただの食べ物ではなく、神様と天皇に献上する食べ物である。このことから、この単語の語源は明らかだ。おほ「大」ともの「物」の合成語である。「おほ」という接頭辞

は構造的にもっと複雑な「おほみ」の接頭辞の省略である可能性が高い(澤潟 1967 : 163b 参考)。この例の場合、この接頭辞の *opomi-* > *opon-* > *opo-* という変化が、後に続く /m/ の前においては自然である。上代日本語 *opo-mono* には平安時代と鎌倉時代に「おもの」と「をもの」の二通りの振り仮名使いがある。*opo-* > *o-* という変化が日本語歴史上独特で、丁寧語の接頭辞である「おほ」以外に見られない。この接頭辞以外の上代日本語の /opo/ という音韻連続が平安時代の /owo/ と現代日本語の /o:/ に対応する。よって、この単語についてはアルタイ諸語との関係を想定するのは不可能であろう。

4) 日本語の中の中国語借用語はアルタイ説を支持する。

スタロスチンはアルタイ祖語 *sir₂o 「漏れる、にじみ出る」(チュルク祖語 *sir₂-, モンゴル祖語 *sir-, ツングース祖語 *sire, 韓国祖語 *hülü-) を日本祖語 *situ 「湿っぽい」と比較している(Starostin 1997 : 337)。日本語の歴史を無視しているスタロスチンにとっては、彼が日本祖語とみなす単語 *situ が、なぜ「つれづれ草」中に初めて使われているのかわからないようである。実は、彼の比較の対象に選んだ日本祖語 *situ 「湿っぽい」は明らかな中古中国語の借用語なのである。「しつ」は「湿」の漢字の慣用音である²。また、中期韓国語 *hülü-* は「漏れる、にじみ出る」ではなく、「流れる」という意味で、ツングース語 *sire (実際 *sir- または *siri-) は「絞る、乳を搾る」という意味である(Cincius 1977 : 93b)。さらに、韓国祖語の *hülü- は * の必要のない、文献ですでに確認された中期韓国語の形である。スタロスチンは、ここでもまた、韓国祖語の再構を無視している。中期韓国語 *hülü-* はアクセント上、八類の動詞で、韓国祖語 *hülül- にさかのぼる(Ramsey 1991 : 236)のである。この単語のうちの、二番目の /-l/ はアルタイ語との関係の確立をより困難にしている。最後に、モンゴル祖語 *sir- はおそらく WM *sirbigine-* 「しとしと降る、水をまく」からうまく切りとられた要素で、残りの *-bigine-* は勝手に省かれたまま、何の説明も施されていない。

5) 音韻対応も無視／他の問題

スタロスチンはアルタイ祖語 *bio:ji 「尊敬する」(チュルク祖語 *ba:j; モンゴル祖語 *bejle, ツングース祖語 *buje-, 韓国祖語 *pòy-hwó-) を日本祖語 *bija- と比較している。まず、音韻対応をみる前に、対応よりささいな問題を見てみようと思う。意味的には、チュルク祖語 *ba:j は「金持ち」だが、金持ちの人々が尊敬される可能性はある。中期韓国語 *pòyhwó-* (スタロスチンが行ったように二つの形態素にわけた根拠はない)は「勉強する」という意味である。次の例はもっと問題が大きい。モンゴル祖語 *bejle* 「三位の親王」はモンゴル人が清時代以前には使っていない爵位で(Jagchid & Hyer 1979 : 276)、満州語の *beile* 「三位の親王」からの明らかな借用語である。この他にも、スタロスチン式のアルタイ語学は言語の歴史だけではなく、

2 「しつ」はめったにしか出てこない *syuu* < *sipu* (< MC 湿 *ci:p*) の音読みと同じように、MC *-p* の場合に慣用音に *-tu* が出る例はある。たとえば、MC 立 *lip* > 慣用音 *ritu* (めったにしか出てこない *ryuu* < *ripu* の代わりに)、MC 執 *ci:p* > 慣用音 *situ* (めったにしか出てこない *syuu* < *sipu* の代わりに)。

民族の歴史をも無視している。スタロスチンの韓国祖語 *pòy-hwó- のようにモンゴル祖語 *bej-le の形態分析の根拠もまた、とにかく新しいアルタイ語源を発見したいという願望以外の何ものでもないという気がしてならない。ツングース祖語 *bujе-: はどのように再構されたのか全く不明である。他のツングース語の単語も引用せず、その再構の手順も示さずに、実に身勝手な再構である。本来、それはツングース祖語 *bujе-: ではなく、ツングース祖語 *bu:gu:- 「守る、保存する」(Cincius 1975 : 102a) だと思われるが、それは意義からの私の当て推量に過ぎない。守るものを尊敬することだろうか。しかし、私の当て推量が正しければ、この単語にはツングース祖語 *-y- ではなくて、ツングース祖語 *-g- があったようである。上代日本語 *wiyabiy-* 「尊敬する」(反復相形 *wiyam-ap-* も参考) はたしかにスタロスチンの日本祖語 *bijá- がもととなった語形だが、上代日本語 /wi/ は日本祖語 *bi, *bu[C]i と *bo[C]i に対応し、日本語のデータは *bi- より *bu- を支持している。(現代日本語のうやまう (Martin 1987 : 781) も参考)。スタロスチンの選んだ *bi- はまた日本語のデータより彼のアルタイ語源説に基づいているようだ。しかし、これらのささいな問題よりも、音韻対応の問題が一番重要である。アルタイ祖語 *io: は有名な「石」(チュルク祖語 *da:l₂, モンゴル祖語 *tilayun, ツングース祖語 *žolo, 韓国祖語 *twolo-k, Jpn. *(d)isi) という単語のように、チュルク祖語 *a:, モンゴル祖語 *i, ツングース祖語 *o, 韓国祖語 *wo, Jpn. *i 間に規則的な対応がある。スタロスチンの語源に見られるのは不規則的な チュルク祖語 *a:, モンゴル祖語 *ei, ツングース祖語 *u, 韓国祖語 *oy, と Jpn. *u 対応でしかないのである。

6) 日本語のデータだけではなく、他の言語のデータにも大きな問題

例として、スタロスチンの韓国語のデータの取り扱いについて見ていきたいと思う。たとえば、韓国祖語 *mòr(ŋ)ái 「砂」という再構がある(1991 : 254)。しかし、その (ŋ) は韓国語のデータに基づいていないのである。中期韓国語の綴り方 *몰예/molwól.óy/* は、方言資料 (*molge, molge, molgEmi* (Choy 1978 : 89)) によってよく支持される摩擦音-G のある *mwólGóy* を示している。前にも述べたように、スタロスチンの『韓国語の再構』は大部分 * がつけられた中期韓国語の単語を対象にしている。スタロスチンがハングルの中の韓国語資料に精通していれば、多分韓国祖語の *pí 「雨」と *hyé 「舌」(1991 : 254) は再構しなかっただろう。この単語は両方『鶏林遺事』(1103 紀元後) に記録されている。中期韓国語の *ㅁ/pí/ 「雨」は二音節の *pi wi として出ており、元来この単語は二音節だったのを方言資料も証明している。(たとえば、慶尚南道などの *pigi* 「雨」(Choy 1978: 38))。中期韓国語の *혀/hyé/ は元来、語末音の -t があったようである。また、その語末音の -t の存在を支持する方言データもある (Choy 1978: 425-27)。スタロスチンも韓国語方言の資料を多く引用するが、しかしその資料の出所は明らかではない。少なくとも、彼の文献目録には韓国語方言の典型的な辞書や参考書が挙げられていない。この事実もまた、スタロスチンの韓国語方言資料のデータが信頼を欠くものであることを裏付けているように思われる。たとえば、咸鏡方言 *jx₂* 「舌」(Starostin 1991 : 255) もやはり存在が明らかでない単語である。*jx₂* の間違いとしても、*hyé の対応は不可能だろう。どの咸鏡方言でも、この単語の *hy-* は *s-* になった。咸鏡方言には一番よく出る形式は *sette* である (Choy

1978 : 426)。

Starostin式のアルタイ語説はだいたい基礎語彙を基に主張され、基礎文法の要素を完全に無視している。日本語のように豊かな形態法を持つ言語を比較する場合には、基礎語彙の証拠より基礎の文法的対応が大切であろう。では、ここで、「アルタイ語族」と日本語との体系的な一致を探るための私なりの幾つかの試論を提示してみようと思う。まず、「アルタイ語族」を形成する五つの言語から動詞の基本的な接尾辞を10個選び、比較する。次に、「アルタイ語族」を形成する五つの言語から名詞の基本的な接尾辞を10個選び、比較する。そして最後に、基礎語彙の二つの分野から10個ずつの単語を選び、再び比較を試みる。

テスト1：文法のシステム

注意：同源の文法要素に同じアルファベットをつけた。たとえば、A, A, A或いはA, B, B, B, C。起源が異なる場合には、別々の文字をつけた。たとえば、A, B, C, D, E。

表一：動詞

文法要素	日本祖語	韓国祖語	満・ツ祖語	モンゴル祖語	チュルク祖語
過去	*-k'/_e	*-ke-	*-kV-	*-b'/_e	*-dV
	A	A	A	B	C
完了	*-ta-	*-ta-	*—	*-lu'a/*lü'e	*-g'/_e
	A	A	—	B	C
完了	*-n-	*-n	*-n	—	*-m'/_s
	A	A	A	—	B
終止形	*-um	*-ta-pi	*-bi	—	—
	A	B	B	—	—
連体形	*-uro	*-(u/o)lʔ	*-rV-	—	*-r
	A	A	A	—	A?
推量	*-m(a)-	*-ma	*-mu/me: ?	—	*-s'/_e
	A	A	A	—	B
推量	*-masi	*	*-mc'/_e	—	—
	A	B	A	—	—
否定	*-ana-	*-ani	*a:na	*-güi	*-ma/e-
	A	A	A	B	C
他動詞／	*-Ci-	*-ki-	*-gi-	—	—
自動詞	A	A	A	—	—
切り替え					
接続助詞	*-mi	*-mye	*-me	*-n	*-p
	A	A	A	B	C

表一を見れば、日本祖語と韓国祖語と満・ツングース祖語には動詞の共通の要素が多くみられるが、モンゴル祖語とチュルク祖語との動詞の間には共通の要素がほとんどないことがわかる。それでは、次に名詞のについて見てみようと思う。

表二：名詞

文法要素	日本祖語	韓国祖語	満・ツ祖語	モンゴル祖語	チュルク祖語
主格	*-i	*-i	—	—	—
	A	A	—	—	—
属格	*-no	*-s	*-i	*-n	*-n
	A	B	C	A	A
属格	*-n-ka	—	*-n-ki	—	*-n-ki
	A	—	A	—	A
属/在格	*-tu	*-Vy	*-du:	*dur ?	*-dʰ/ε
	A	B	A	A	B
在格	*-ra	*-la	*la:	—	*-gʰ/ε
	A	A	A	—	B
与格	*-ni	—	—	—	*-a/-e
	A	—	—	—	B
対格	*-wo	*-pī-l	*-bʰ/ε	*-gi	*-g
	A	A	A	B	B
奪格	*du-[K]a	—	*-duk	*-ača	*-dʰ/n
	A	—	A	B	C
沿格	—	*-li	*-li:	—	—
	—	A	A	—	—
名詞形	*-i	*-i	—	*-i	*-lʰ/k
	A	A	—	A	B

表二を見ると、表一とほとんど同じように日本祖語と韓国祖語と満・ツングース祖語は名詞の共通の要素が比較的多くみられるが、モンゴル祖語とチュルク祖語との名詞の共通の要素は少ない。では最後に二種類の基礎語彙について見てみよう。

テスト2：基礎語彙

注意：同源の文法要素に同じアルファベットをつけた。たとえば、A, A, A或いはA, B, B, B, C。起源が異なる場合には、別々の文字をつけた。たとえば、A, B, C, D, E。

表三：身体部位

意味	日本祖語	韓国祖語	満・ツ祖語	モンゴル祖語	チュルク祖語
「鼻」	*pana	*kwoh	*xoŋo-kto	*kabar	*burun
	A	B	B	E	F
			*ŋiaksa		
			C		
			*oporo		
			D		
「目」	*ma-	*nwun	*ya-sa	*nidün	*köz
	A	B	C	D	E
「耳」	*mimi	*kwuy	*sian	*ciki-n	*kulgak
	A	B	C	D	B?
「手」	*ta-	*swon	*ŋa:la	*gar	*el
	A	B	C	D	E
「足」	*panki	*pal	*palgan	*köl	*hadak
	A	A	A	B	C
「骨」	*pone	*s-pye	*girma-ksa	*ya-sun	*söŋük
	A	A	B	C	D
「歯」	*pa	*ni	*xü-kte	*sidün	*tiš
	A	B	C	D	E
		*-pal	*palon		
		A	A		
「毛」	*ka-	*kalh	*ñu:ri-kte	*qılga-sun	*sač
	A	A	B	D	E
			*puñeke		
			C		
「舌」	*sita	*hit	*xileNu	*kele-n	*tıl
	A	A	A?	A?	B
「血」	*ti	*hVpi	*sia(ŋ)-kse	*ti-sun	*kaŋ
	A	B	C	A	D

表三を見ると、日本祖語と韓国祖語は身体部位を表す共通の基礎語彙を多くもっているが、満・ツングース祖語との身体部位を表す共通の基礎語彙は少ない。そして、モンゴル祖語とチュルク祖語との人体の共通の基礎語彙はほとんどないこともわかるであろう。では、自然を表す基礎語彙はどうだろう。

表四：自然名称

意味	日本祖語	韓国祖語	満・ツ祖語	モンゴル祖語	チュルク祖語
「日」	*pi A	*hoy B	*sigun C	*nara-n D	*kün E
「月」	*tuku- A	*tolal A	*biaga B	*saran C	*hay D
「水」	*me- A	*mul A	*me: A	*usun B	*sub C
「火」	*po- A	*pul A	*togo B	*gal C	*ho:t D
「土」	*tuti A	*holk B	*na: C	*gaɣar E	*yer F
			*tokala D		
「木」	*ko- A	*namk- B	*mo: C	*modun C?	*i gač D
「雨」	*ama- A	*pigi B *mah A	*udan C *pigi- B *tugde D *aga E	*boruga-n F	*yagmur G
「雲」	*kumwo A	*kwulum A	*tugi B	*egüle-n C	*bulut D
「風」	*kansa- A *-si B	*polom C	*xedün D	*salki-n E	*yel F
「海」	*umi A *bata B	*pata B	*lamu C	*dalai D	*teŋiz E

表四を見ると、表三と同じように、日本祖語と韓国祖語は自然を表す共通の基礎語彙を幾つ

ももっているが、満・ツングース祖語との自然を表す共通の基礎語彙は少ない。しかし、モンゴル祖語とチュルク祖語との自然を表す共通の基礎語彙がほとんどない。ここで、すべての結果をまとめてみよう。共通性がある場合には、+で示し、共通性がない場合には、-で示した。共通性が少ない場合には、+/-で示した。

表五：まとめ

	日本祖語	韓国祖語	満・ツ祖語	モンゴル祖語	チュルク祖語
テスト1					
動詞の要素	+	+	+	-	-
名詞の要素	+	+	+	+/-	+/-
テスト2					
人体の語彙	+	+	+/-	-	-
自然の語彙	+	+	+/-	-	-

表五を見ると、日本祖語と韓国祖語は明らかに同系で、満・ツングース祖語もその二つと同系の可能性が比較的高いと思われる。しかし、モンゴル祖語とチュルク祖語が日本祖語、韓国祖語、満・ツングース祖語との共通の文法要素と基礎語彙をほとんどもっておらず、同系の可能性は非常に低いと言えるだろう。同時に、Miller-Starostin式のアルタイ語説は信憑性が非常に低いと言えるだろう。

韓国語仮説 (Martin 1966など、Whitman 1985など、Serafim 1994, Vovin 2000a & 2000b)

Miller-Starostin式のアルタイ語仮説と比べて、子音とアクセントの対応がより明らかである。信頼できる語源も少なくない。しかし、母音の対応のほうは、アルタイ語仮説のように大きな問題ではないが、問題点がいくつかある。この説の弱点は、二言語間の比較 (binary comparison) であるため、説明力が色々な面で制限されることだろう。特に単語と基礎形態要素の比較の場合、片方の言語にない要素の比較は不可能である。たとえば、身体部位を表す基礎語彙と自然を表す基礎語彙を見ると、同じ語源を持っている単語はあるが、特別に多いわけではない (上の表三と表五参考)。勿論、文法の分野での規則的に対応する要素が基礎語彙より多いので (上に載せた第三表と第五表参考)、日韓同系説は一番信憑性の高い説だと言えるだろう。

これから、どこへ？

以上、色々な仮説を見てきたが、一番信頼できるのは日本語と韓国語及び満・ツングース語との比較だろう。チュルク語とモンゴル語との比較はおそらく系統関係を証明できないだろうと思われるが、まだ完全に否定できるわけではない。しかし、日本語系統論の問題を解決することを試みる前に、色々な問題を解決しなければならない。そこで、下に重要であると思われる問題を幾つか掲げてみたいと思う。

日本祖語の再構の諸問題

今までの日本祖語の再構（たとえばMartin1987）は、子音とアクセントについてはよくできているが、母音の再構のほうは不十分である。Martinの日本祖語の母音体系は大野晋の母音体系に従っているが、私の意見では、これは正しくないと思われる。最初に服部四郎（1978-79）によって提案された仮説によれば、日本祖語の母音には（*a, *i, *u, *ə）の他に（*e, *o）もあったようである。ただし、服部の*uの存在には疑問点がある（Whitman 1985:48-50, 52-60参考）。最近、Thorpe（1983）、Serafim（1999）、Miyake（2001）、Whitman（2003）などもこれと同じ結論に到った。

この説が正しいとすれば、いくつかの点については、日本語とアルタイ語との比較はもっと難しくなる可能性がある。たとえば、これまで、日本祖語 *mi- 1.1, 韓国中世語 *múl*・昱, 満・ツングース祖語 *mo: ?<*moro 「水」を比較するとき、問題が全くなかったわけではないが、少なくとも三語族の母音はすべて同じ高さの母音だった。しかし、日本祖語形は *mi-ではなく、*me-であるとする、韓国語とツングース語との比較はより難しくなるだろう。もちろん、比較がより簡単になる場合もある。たとえば、日本祖語 *sima 2.3 「島」と日本祖語 *kuma 2.3 「熊」の代わりに、日本祖語 *sema 2.3と日本祖語 *koma 2.3となると、これらは韓国祖語 *syèmV(> 韓国中世語 :syem : 섬)と*kòmV(> 韓国中世語 :kwom : 곰)と殆ど完全に一致する。しかし、いうまでもなく、「島」と「熊」は「水」より借用されやすい単語ではある。

韓国語の再構の諸問題

韓国祖語の再構はまだ十分ではない。特に、Yi Kimun（1987, 1991）、Martin（1990など）、Whitman（1985）、Ramsey（1991など）、Vovin（2000a, 2001a）の研究成果によって、この十五年間に顕著な進展をみせてきているが、まだ全体像の一部しか見えていない。ここで特に言及したいのは、次の点である。

中期韓国語の有気子音は二次的で、ほとんど全部が韓国祖語*uまたは*oが脱落してからの*KCまたは*CKの子音連続にさかのぼる。（Ramsey 1991）

中期韓国語	韓国祖語
ph	*pVKまたは*KVp
th	*tVKまたは*KVt
ch	*cVKまたは*KVc
kh	*kVKまたは*KVk

例：

中期韓国語 *thò*-「焼く」<韓国祖語 *toho-, 上代日本語 *yak*-<日本祖語 *daka-「焼く」。

中期韓国語 *khú*-「大きい」<韓国祖語 *huku-, ?上代日本語 *sukuna*-<日本祖語 *suku-na-「少ない」=「多くない」。

Ramsey (1991) による語中の有声子音説よりは、伝統的な軟音化説が正しい (Martin 1996) と思われるが、伝統的な軟音化説に反して、軟音化しない子音は *nC または *IC の子音連続にさかのぼる可能性がある (Vovin 2001a)。

例：

韓国中世語 *kwòp-* 𪛗-「曲げる」(LCT 72b), *kwùp-* 𪛗-「曲げる」(LCT 90a) <韓国祖語 *kunpo-, cf. 上代日本語 *kubo* 「窪み」<日本祖語 *kunpo ?2.1
K *tapal* 다발 「束」<*tanpal, cf. EMJ *taba* 「束」, 日本中古語 *taba-ne-* 「束ねる」<日本祖語 *tanpa 2.4

日本祖語アクセント核と韓国祖語の母音脱落には密接な関係があるようである (Vovin 2000 a)。

韓国語の母音脱落

apocope C1V1C2

syncope (C1)C2V2, C1V1C2V2

日本語のアクセント類

アクセント核のない(2.1, 2.3, 2.4)、頭高の式(2.2b)

尾高形類(2.2a, 2.5)

例：

中期韓国語

上代日本語

2.1 HH-H

pyélh 「星」

posi

thwóp 「爪」

tumey

2.2a

stáh 「土」

sita 「下」

pcó- 「織る」

pata 「機」

2.2b:

twolh 「石」

isi <* (d) isi

kyèth 「方」

kata

2.3k

kàphól 「皮、殻」

kapa 「皮」

cìp 「家」

ipye

2.4

cyéc 「乳」

titi

póy 「船」

pune

2.5

máh 「梅雨の雨」

amey 「雨」

àchóm 「朝」

asa

ツングース祖語と他の「アルタイ」言語の再構の諸問題

ツングース祖語の再構も韓国祖語の再構同様に、まだ問題点が非常に多い。特に、語中の子音連続が明らかでない（池上1989は最近の研究の中で一番重要な位置をしめる。）。³

今の時点では、モンゴル祖語の再構には特に未解決の問題はないようだが、契丹語はまだ未解読で、康家語のように新しいモンゴル語が発見される可能性もあり、モンゴル祖語の再構はこれから様々な修正が必要になる可能性がある。

チュルク祖語の母音組織の再構も大きな問題点として残っている。共通チュルク（Common Turkic）祖語の母音組織は今の段階でだいたい明らかになったと言えるが、Chuvash語の資料を考慮に入れると、今まで色々な試みがあったが、総合的な母音組織の再構はまだ出来ていない。

形態要素の比較がまだ不十分である。

日本祖語と韓国祖語の比較以外（Martin 1990, 1995）、「アルタイ」諸言語との比較は今まででは語彙の比較ばかりで、形態要素の比較は最近の Itabashi（1988, 1989, 1990, 1991a, 1991b, 1993a, 1993b, 1996）（格助詞の比較）；Vovin（2000a）（動詞の形態）しか見られない³。語彙の比較は形態の比較より容易だが、証拠としては共通の形態のほうが同系の語彙よりも重要である。

Vovin（2001b）の論文からの新しい比較の例：

(1) 動名詞の接尾語 *-gi

日本語：上代日本語 -yi < *-Ci < **-Gi⁴，動名詞の接尾語、たとえば kak-「書く」、kak-yi「書き」；yom-「数える」、yom-yi「計算」。

韓国語：韓国中世語 -ki，動名詞の接尾語、たとえば ho-「する」、ho-ki「すること」；psu-「使う」、psu-ki「使うこと」。

？チュルク語：古代チュルク語 -i/-i < *-yī, *-gi，稀な動名詞、たとえば qal-「残る」、qal-i

3 Millerも形態要素の比較について多少の論文を出したが（文献目録参考）、Millerがかかげた資料のなかには、資料の扱い方および言語学的な間違いが多く、信憑性が低い。

4 日本祖語の動名詞*-Giと不定詞*-eはアクセントの証拠によって別々な形態要素だったと思われる。11世紀の中古日本語の動名詞-iにはアクセントの下がりはなく、不定詞-iには下がりがある（Martin 1987：211-14参考）。

「残り」; *yaz-*「伸される」, *yaz-i*「盆地」.

上代日本語

多爾具久能佐和多流伎波美

taniNkuku-no *sa-watar-u* *kyipam-yi*

ひきがえる一属格 接頭語一渡る一連体 極める一動名詞

ひきがえるが渡っていく際 (萬 V : 800)

中期韓国語

kul *su-ki-Gwa* *kal* *psu-ki-Gwa* *poyhwo-n-i*

文字 書く一動名詞一従格 剣 使う一動名詞一従格 勉強する一過去一動名詞

[彼が]文字の書き方と剣の使い方を勉強して (杜詩彦解 VII : 15)

古代チュルク語

il-gärü *šantuŋ* *yaz-ï-ka* *tägi* *sülä-d-im*

東一内格 山東 盆地一3所有一与格 まで いくさをやる一過去一1単

東の方に、山東の盆地まで、いくさをやった (KTs 3)

(2) 他動性の切り替え (TRANSITIVITY FLIPPER) *-gi-

日本語: *-ey-/i-y-* <*V-Ci- <***V-Gi-の中の 上代日本語 *-y-*, 他動性の切り替え、たとえば *tuka-*「付く」(自動詞), *tukey-*「付ける」(他動詞) (<*tuka-Gi-), *yaka-*「焼く」(他動詞), *yakey-*「焼ける」(自動詞) (<*yaka-Gi-).

韓国語: 韓国中世語 *-Gi-*, *-hi-*, *-ki-*など、他動性の切り替え、たとえば: *hel-*「壊す」(他動詞), *hel-Gi-*「壊れる」(自動詞), *anc-*「座る」, *anc-hi-*「座らせる」。

満ツングース語: エヴェンキ: *-gii-*, 他動性の切り替え、たとえば: *kese-*「悩む」=> *keseegii-*「拷問にかける」, *aru-*「意識を回復する」=> *arugii-*「復興する」, *jalup-*「満ちる」=> *jalupkii-*「満たす」(Vasilevich 1940 : 93), 満州語の稀な anticausative *-gi-*: *algi-*「有名だ」< *ala-*「報告する」同じ語源の可能性あり。

上代日本語

於毛思路伎野乎婆奈夜吉曾

omosirwo-kyi *nwo-woba* *na-yak-yi-so*

美しい一連体 野原一対格 否定一焼く一動名詞一する

美しい野を焼かないで (萬 XIV-3452)

夜気牟志婆加岐

yakey-m-u *siba-gakyi*

焼ける－推量－連体 柴－垣
 焼ける柴垣（古事記歌謡 109）

中期韓国語

ha-n mwul-ul he-no-n-i
 大きい－連体 物－対格 壊す－現在－連体－動名詞
 大きい物を壊す（金剛經 I: 7）

noh-i hel-Gi-ti mwot-ho-mye
 刃－主格 壊す－受け身－動名詞 できない－する－接続
 刃は壊れなくて...（月印 X: 70）

エヴェンキ語:

perron eme-cee-l-di passazhir-il-di jalup-caa-n
 ホーム 来る－過去－複数－具格 乗り手－複数－具格 満ちる－過去－3単
 ホームは来た乗り手で満ちた（Boldyrev 1994: 213b）

dilacaa cuutuuma-wa tigekeen-me-tin jalup-iknan-in ñama-t
 太陽 青い－対格 カップ－対格－3複 満ちる－かぎりまで－3単 暖かさ－具格
 jalup-kii-caa-n
 満ちる－使役－過去－3単
 太陽は暖かさで青いカップを端まで満たした（Boldyrev 1994: 213b）

(3) 否定詞 *-e

日本語：上代日本語 *-[y]i* < *-e, 否定詞、たとえば *kyik-yi* 「聞き」 *ip-yi* 「言い」

韓国語：韓国中世語 *-e/-ye/-a*, 否定詞、たとえば *kel-e* 「歩き」; *kask-a* 「壊し」。

?チュルク語：OT *-ä/-a*, 否定詞、たとえば *egir-* 「囲む」、*egir-ä* 「囲み」、*tut-* 「持つ」、*tut-a* 「持ち」。（Tenishev et al. 1988: 474）。

上代日本語

都流伎多智許志爾刀利波枳佐都由美乎多爾伎利物知提

turugyi-tati kōsi-ni twor-i-pak-yi satu-yumyi-wo
 剣－太刀 腰－与格 取る－否定詞－佩く－否定詞 狩猟－弓－対格
 ta-nigyir-i-mot-i-te
 手－握る－否定詞－持つ－否定詞－接続
 [若い男が]剣太刀を腰におび、弓矢を手に握り持って（萬 V: 804）

中期韓国語

kil pes-e sswō-sy-a sey sal-ay ta ti-n-i
道 はずれる－否定詞 射る－敬語－否定詞 三つ 矢－与格 皆 落ちる－連体－動名詞
道からはずれて、射て、[彼を追う]三人は三つの矢で落とされた（龍飛御天歌 36）

古代チュルク語

toquz er-ig egir-ä toqï-dï
九 武士－対格 囲む－否定詞 撃ち破る－過去
[彼が]九人の武士を囲んで、撃ち破った（KTb 36）

日本語系統論において基礎語彙の比較は、あまり決定的な結果には到っていないが、今すぐ諦めずに、このような細かい文法要素の比較を行っていけば、徐々に日本語の系統が分かるようになるだろう。長田（本論文集掲載）は否定的だが、私はそう期待している。

文 献

日本語の文献

古事記歌謡, 712

萬 万葉集 759以後

中期韓国語の文献

金剛經 金剛經彦解, 1464

杜詩彦解, 1481

月印 月印釈譜, 1459

龍飛御天歌, 1445

満州語の文献

MYK Manju-i Yargiyan Kooli, 十七世紀後半（?）

SA Taizu Hūwangdi Ming gurun-i cooha-be Sargū alin-de ambarame
efulehe baita-be tucibume araha bithe, 十七－十八世紀

モンゴル文語

UD Üliger-ün dalai, 十八世紀（?）

古代チュルク語

KTb Kül Teginの大碑銘 732

KTs Kül Teginの小碑銘 732

参考文献

- Baskakov, Nikolai A. (1981) *Altaiskaia sem'ia iazykov i ee izuchenie* [The Altaic Language Family and Its Study]. Moscow : Nauka.
- Benedict, Paul K. (1990) *Japanese/Austro-Tai*. Ann Arbor: Karoma.
- Boldyrev, Boris V. (1994) *Russko-evenkiiskii slovar'*. Novosibirsk : Nauka.
- Cincius, Vera I. (ed.) (1975-77) *Sravnitel'nyi slovar' tunguso-man'chzhurskikh iazykov*. tom 1-2. Leningrad: Nauka.
- Frellesvig, Bjarke (1998) A common Korean and Japanese noun particle: Korean *ulo* :: Japanese *to*. In: Byung-Soo Park and James Hye Suk Yoon (eds.) *Selected Papers from the 11th International Conference on Korean Linguistics*, July 6-9, 1998. University of Hawaii at Manoa, pp. 336-45.
- 服部四郎 (1978-79) 「日本祖語について」 1-22. 『月刊言語』の掲載。
- 家本太郎 (1996) 「大野説の問題点—文法的特徴に関して」 『日本研究』 13:232-42.
- 池上二郎 (1989) 「ツングース諸語」 『言語学大辞典』。第二冊 : 1058-1083. 東京 : 三省堂。
- Itabashi, Yoshizoo (1988) A comparative study of the Old Japanese accusative case suffix *wo* with the Altaic accusative case suffixes. *Central Asiatic Journal* 32/3-4 : 193-231.
- (1989) The origin of the Old Japanese prosecutive case suffix *yuri*. *Central Asiatic Journal* 33/1-2 : 47-66.
- (1990a) The origin of the Old Japanese accusative case suffix *i*. *Ural-Altaische Jahrbücher Neue Folge*, 9 : 152-75.
- (1990b) 「古代韓国語の人称代名詞の起源について」 『言語科学』 25:113-25. 福岡 : 九州大学言語文化部言語研究会。
- (1991a) The origin of the Old Japanese lative case suffix *gari*. *Ural-Altaische Jahrbücher Neue Folge* 10 : 143-58.
- (1991b) The vowel system of Late Middle Korean. 『言語文化論究』 2:35-47. 福岡 : 九州大学言語文化部言語研究会。
- (1991c) The origin of the Old Japanese genitive case suffixes **n/nö/na/ngga* and the Old Korean genitive case suffix **i* in comparison with Manchu-Tungus, Mongolian, and Old Turkic. *Central Asiatic Journal* 35/3-4 : 231-278.
- (1993a) On the main designations of location and direction in Altaic and in Korean and Japanese. *Ural-Altaische Jahrbücher Neue Folge* 12:122-46.
- (1993b) A comparative study of the Old Japanese and Korean nominative case suffixes *i* with the Altaic third person singular pronouns” *Central Asiatic Journal*, 37.1-2:82-119.
- (1996a) A comparative study of the Old Japanese locative case suffix *TU* with the Altaic locative and the related case suffixes. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungarica* XLIX.3:373-394.
- (1996b) 「高句麗、新羅、百済の古代三国における『尸』の音価とその言語的相違」 『言語科学』 31:15-38. 福岡 : 九州大学言語文化部言語研究会。
- (1996c) 「古代韓国語における一人称複数代名詞 *uri* の起源について」 『比較社会文化』 2:177-82. 福岡 : 九州大学。

- (1998a) 「古代日本語、古代琉球語の対格接語の形成について。その1：日本[*琉球]祖語の復元」『言語文化論究』 9:209-223. 福岡：九州大学。
- (1998b) 「古代日本語、古代琉球語の対格接語の形成について。その2：比較方法による比較」『言語科学』 33:81-107. 福岡：九州大学言語文化部言語研究会。
- (1999) 「混成言語と日本語の形成過程」『比較社会文化』 5:41-55. 福岡：九州大学。
- Jagchid, Sechin & Hyer, Paul (1979) *Mongolia's culture and society*. Boulder: Westview Press.
- 川本崇雄 (1978) 『南から来た日本語』東京：三省堂。
- (1980) 『日本語の源流』東京：講談社。
- 児玉望 (1996) 「ドラヴィダ言語学の立場から」『日本研究』 13:222-31.
- Krishnamurti, Bhadriraju (2001) *Comparative Dravidian linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Martin, Samuel E. (1987) *The Japanese language through time*. New Haven & London: Yale University Press.
- (1990) Morphological clues to the relationships of Japanese and Korean. In: Philip Baldi (ed.) *Linguistic change and reconstruction methodology*, 483-50. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- (1991) Recent research on the relationships of Japanese and Korean. In: Sydney M. Lamb and E. Douglas Mitchell (eds.) *Sprung from some common source*, 269-292, Stanford: Stanford University Press.
- (1992) *A reference grammar of Korean (A complete guide to the grammar and history of the Korean language)*. Rutland and Tokyo: Charles E. Tuttle.
- (1995) On the prehistory of the Korean grammar: verb forms. *Korean Studies* 19:139-150.
- (1996a) The Middle Korean marker of politeness *-ngi*. In: Sim Cayki (ed.) *Yi Kimun cengnyen thoyim kinyem noncip*, 1011-1021. Seoul: Sinkwu munhwasa.
- (1996b) *Consonant lenition in Korean and macro-Altaic question*. Center for Korean Studies Monograph 19. Honolulu: University of Hawaii, Center for Korean Studies.
- (1997) How did Korean get *-l* for Middle Chinese words ending in *-l*? *Journal of East Asian Linguistics*, 6.3:263-71.
- (2000) How have Korean vowels changed through time. *Korean Linguistics* 10: 1-59.
- Miller, Roy A. (1971) *Japanese and the other Altaic languages*. Chicago: University of Chicago Press.
- (1979a) Old Japanese and Koguryo fragments: A re-survey. In: George Bedell (ed.) *Explorations in linguistics, Papers in honor of Kazuko Inoue*, 348-68. Tokyo: Kenkyuusha.
- (1979b) Old Korean and Altaic. *Ural-Altaische Jahrbücher* 51.1-54.
- (1980) *Origins of the Japanese language*. Seattle and London: University of Washington Press.
- (1981) Altaic origins of the Japanese verb classes. In: Yoël Arbeitman and Allan R. Bomhard (eds.) *Bono homini donum. Essays in historical linguistics in memory of J. Alexander Kerns*. Amsterdam: John Benjamins.
- (1982) Japanese evidence for some Altaic denominal verb-stem derivational suffixes. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungarica* XXXVI.1-3:391-403.
- (1985a) Altaic connections of the Old Japanese negatives. *Central Asiatic Journal* 29.1/2:35-84.
- (1985b) Apocope and the problem of Proto-Altaic *ia (I). *Ural-Altaische Jahrbücher Neue Folge*, 5:187-207.
- (1985c) Externalizing internal rules: Lyman's law in Japanese and Altaic. *Diachronica* II.2:137-65.

- (1986) Altaic evidence for prehistoric incursions of Japan. *Ural-Altaische Jahrbücher* 58:39-64.
- (1987) Proto-Altaic *x-. *Central Asiatic Journal*, 31.1/2:19-63.
- (1991a) Japanese and Austronesian. *Acta Orientalia Societates Orientales Danica* 52: 148-68.
- (1991b) Anti-Altaists contra Altaists. *Ural-Altaische Jahrbücher* 63:39-64.
- (1991c) How many Verner's laws does an Altaicist need? In: William G. Boltz and Michael C. Shapiro (eds.) *Studies in the historical phonology of Asian languages*. 176-204. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- (1992) On some petrified case formations in the Altaic languages. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungarica* XLVI.2/3:299-310.
- (1994a) Old loanwords in Japanese and "Omnicomparativismus." *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 85:221-236.
- (1994b) *Altaische schamanistische termini im Japanischen*. Hamburg: Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens.
- (1994c) The original geographic distribution of the Tungus languages. *Non-Slavic Languages of the USSR, Papers from the Fourth Conference* (Chicago, 1985) 272-297. Columbus, Ohio: Slavica Publishers.
- (1996) *Languages and history: Japanese, Korean, and Altaic*. Bangkok: White Orchid Press.
- Miyake, Marc H. (1998) Hyangchal: a modern view of an ancient script. In: Byung-Soo Park and James Hye Suk Yoon (eds.) *Selected Papers from the 11th International Conference on Korean Linguistics*, July 6-9, 1998, 346-355. Honolulu: University of Hawaii at Manoa.
- (1999) *The phonology of eighth century Japanese revisited: Another reconstruction based upon written records*. Unpublished doctoral dissertation, University of Hawaii at Manoa.
- (2001) *Philological evidence for mid vowels in Pre-Old Japanese*. Unpublished paper.
- 村山七郎 (1981) 『日本語の起源をめぐる論争』東京：三一書房。
- (1982) 『日本語：タミル語起源説批判』東京：三一書房。
- (1988) 『日本語の起源と語源』東京：三一書房。
- 澤潟久孝 (編) (1967) 『時代別国語大辞典上代編』東京：三省堂。
- 大野晋 (1957) 『日本語の起源 (旧版)』東京：岩波書店。
- (1980) 『日本語の形成』(『日本語の世界』1)。東京：中央公論社。
- (1994a) 『日本語の起源 (新版)』東京：岩波書店。
- (1994b) 「日本語の起源について」『月刊日本語論』11:68-84.
- (2000) 『日本語の形成』東京：岩波書店。
- 長田俊樹 (1996) 『日本語＝タミル語同系説』の周辺をめぐる『日本研究』13:169-184.
- Oyler, Gary G. (1997) *The beginning of the /N/: In search of origin of the noun-final mora nasal in the language of Hateruma*. Unpublished MA thesis, University of Hawaii at Manoa.
- Polivanov, Evgenii (1968) (original publication 1924). K rabote o muzylal'noi akcentuacii v iaponskom iazyke (v sviazi s malaiskimi). In: Lev Kontsevich (ed.) E.D. Polivanov. *Stat' i po obshchemu iazykoznaniuu*, 146-55. Moscow: Glavnaia redaktsiia vostochnoi literatury.

- Ramsey, S. Robert. (1978) *Accent and morphology in Korean dialects*. Kwukhak chongse, 9. Seoul: Thap Chwulphansa.
- (1991) Proto-Korean and the origin of the Korean accent. In: William G. Boltz and Michael C. Shapiro (eds.) *Studies in the historical phonology of Asian languages*, 213-238. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- (1993) Some remarks on reconstructing Earlier Korean. *Ehak yenkwu* 29.4:433-442.
- (1996) Some preliminaries to reconstructing liquids in earlier Korean. In: Sim Cayki (ed.) *Yi Kimun cengnyen thoyim kinyem noncip*, 1062-1075. Seoul: Sinkwu munhwasa.
- Ramstedt, Gustav J. (1949) *Studies in Korean Etymology*. Mémoires de la Société Finno-Ougrienne 95. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.
- (1952) *Einführung in die Altaische Sprachwissenschaft*. II. Formenlehre. Suomalais-Ugrilaisen seuran toimituksia 104.2. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.
- 崎山理 (1985) 「マライ・ポリネシア語と日本語」村山七郎など編。『日本語の系統基本論文集』東京：和泉書院。
- (1990) 「古代日本語と源オセアニア語の指示詞の体系」崎山理・佐藤昭裕 (編)『アジアの諸言語と一般言語学』206-219。東京：三省堂。
- (1991) 「日本語の混合的特徴—オーストロネシア語族的要素について—」佐々木高明・大林太良 (編)『日本文化の源流—北からの道・南からの道—』227-225。東京：小学館。
- (1996) Is Japanese an isolated, or Altaic language? In: Keiichi Omoto (ed.) *Interdisciplinary perspectives on the origins of the Japanese*, 281-91. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies.
- (2001) 「オーストロネシア語族と日本語の系統関係」『国立民族学博物館研究報告』25.4 : 465-485。
- Sasse, Werner (1982) 尸 as a phonogram in early Korean writing. In: Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm. Selected Papers from SICOL-1981*, 709-719. Seoul: Hanshin.
- (1988) *Studien zur Entzifferung der Schrift altkoreanischer Dichtung*. Bd. 1-2. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Serafim, Leon A. (1985) *Shodon: The prehistory of a Northern Ryukyuan dialect of Japanese*. Tokyo: Honpo Soseki press.
- (1994) A modification of the Whitman proto-Korean-Japanese vocalic hypothesis. *Korean Linguistics* 8: 181-206.
- (1999) Why proto-Japonic had at least six, not four, vowels. Lecture presented at the Linguistics Seminar at the University of Hawaii.
- Starostin, Sergei A. (1991) *Altaiskaia problema i proiskhozhdenie iaponskogo iazyka*. Moscow: Izdatel' stvo "Nauka".
- (1995) On vowel length and prosody in Altaic languages. *The Moscow Linguistic Journal*, 1: 191-235.
- (1997) On the "consonant splits" in Japanese. In: Irén Hegedű, Peter A. Michalove, and Alexis Manaster Ramer (eds.) *Indo-European, Nostratic, and beyond: Festschrift for Vitalij V. Shevoroshkin*. *Journal of Indo-European Studies Monograph* #22, 326-41.
- (1999) Subgrouping of Nostratic: comments on Aharon Dolgopolsky's *The Nostratic macrofamily and*

- linguistic palaeontology*. In: Colin Renfrew and Daniel Nettle (eds.) *Nostratic: Examining a linguistic macrofamily*, 137-56. Oxford: The McDonald Institute for Archaeological Research.
- 高橋俊三 (編) 1986. 『琉球の方言 11 : 八重山・与那国島』 東京 : 法政大学沖縄文化研究所。
- Tenishev, Edgem R. (ed.) (1988) *Sravnitel' no-istoricheskaja grammatika tiurkskix iazykov. Morfologija*. Moscow: Nauka.
- Thorpe, Maner L. (1983) *Ryūkyūan language history*. Unpublished doctoral dissertation, University of Southern California.
- Vasilevich, Glafira M. (1940) *Ocherk grammatiki evenkiiskogo iazyka*. Leningrad: Uchpedgiz.
- Vovin, Alexander. (1993a) Long vowels in Proto-Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 2.125-134.
- (1993b) *A reconstruction of Proto-Ainu*. Leiden: E.J.Brill.
- (1993c) About the phonetic value of the Middle Korean grapheme △. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London, 16.2:247-59.
- (1993d) Towards a new classification of Tungusic languages *Eurasian Studies Yearbook* 65:99-114.
- (1993e) Notes on some Japanese-Korean phonetic correspondences. *Japanese/Korean Linguistics*, 3:338-350. Stanford: Center for the Studies of Language and Information.
- (1994a) Is Japanese related to Austronesian? *Oceanic Linguistics* 33.2:369-390.
- (1994b) Genetic affiliation of Japanese and methodology of linguistic comparison. *Journal de la Société Finno-Ougrienne*, 85.241-256.
- (1994c) Long-distance relationships, reconstruction methodology, and the origins of Japanese. *Diachronica* 11.1: 95-114.
- (1995) Once again on the accusative marker in Korean. *Diachronica* 12.2:223-36.
- (1997a) The origin of register in Japanese and the Altaic theory. In: Ho-min Sohn and John Haig (eds.) *Japanese/Korean linguistics*, 6:113-133. Stanford: Center for the Studies of Language and Information.
- (1997b) On the syntactic typology of Old Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 6.3:273-290.
- (1998) Japanese rice agriculture terminology and linguistic affiliation of Yayoi culture. In: Roger Blench and Matthew Spriggs (eds.) *Archeology and language*, 2:366-378. London: Routledge.
- (1999a) Once again on the Reading of the Old Korean 尸. In: Sheila Embleton, John E. Joseph and Hans-Josef Niederehe (eds.) *The emergence of the modern language sciences. Studies on the transition from historical-comparative to structural linguistics in honour of E.F.K. Konrad Koerner. vol. 2 : Methodological perspectives and applications*, 289-300. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- (1999b) Altaic evidence for Nostratic. In: Colin Renfrew and Daniel Nettle (eds.) *Nostratic: Examining a linguistic macrofamily*, 367-86. Oxford: McDonald Institute for Archaeological Research.
- (1999c) Altaic, so far. *Migracijske teme*, 15.1/2: 155-213.
- (2000a) On the great vowel shift in Middle Korean and position of stress in Proto-Korean. *Korean Linguistics* 10:61-78.
- (2000b) Pre-Hankul materials, Koreo-Japonic, and Altaic. *Korean Studies* 24:142-155.
- (2001a) North East Asian historical-comparative linguistics on the threshold of the third millenium.

Diachronica 18.1:93-137.

—— (2001b) Japanese, Korean, and Tungusic: Evidence for genetic relationship from verbal morphology. In: David B. Honey and David C. Wright (eds.) *Altaic affinities* (Proceedings of the 40th meeting of the Permanent International Conference (PIAC), Provo, Utah 1997), 183-202. Indiana University: Research Institute for Inner Asian Studies.

Whitman, John B. (1985) *The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean*. Unpublished doctoral dissertation, Harvard University.

—— (1990) A rule of medial *-r- loss in pre-Old Japanese. In: Philip Baldi (ed.) *Linguistic change and reconstruction methodology*, 511-545. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

—— (1994) The accentuation of nominal stems in Proto-Korean. In: Young-key Kim Renaud (ed.) *Theoretical issues in Korean linguistics*, 425-39. Stanford: Center for the Studies of Language and Information.

山下博司 (1996) 「大野晋博士の所謂『日本語＝タミル語同系説』に寄せて —— タミル学徒の雑感」『日本研究』 13:185-221.

Yi, Kimun [Lee Ki-moon] (1987) *Kwuke umwun sa yenkwu*. Seoul: Thap chwulphansa.

—— (1991) *Kwuke ehwi sa yenkwu*. Seoul: Tonga chwulphansa.

Zvelebil, Kamil V. (1990) *Dravidian linguistics: An introduction*. Pondicherry: Pondicherry Institute of Linguistics and Culture.

The Genetic Relationship of the Japanese Language: Where do We Go from Here?

Alexander VOVIN

University of Hawaii at Manoa

Keywords: Japonic, Japanese, Altaic, Austronesian, mixed languages, Korean, Manchu-Tungusic, Manchuric.

This article presents a brief overview of the major theories concerning the origins of the Japanese language. In particular, I demonstrate in some detail why two partially excluding hypotheses: the theory of the mixed Austronesian-Altaic origin and the Altaic theory have multiple shortcomings at the present time. I believe that the most promising theory is the theory of the Koreo-Japonic linguistic relationship, and it also may turn out that both Korean and Japonic are ultimately related to Manchu-Tungusic. I present some initial evidence in favor of this tentative family which I call “Manchuric.”